

甲斐と萬葉集(六) — 廣瀬本萬葉集書写者の酒折の宮の歌 —

Kai and Man'yōshū (6) : On the Uta of Sakaorinomiya

Written by the Scribes of the Man'yōshū, the Hirose Manuscript

鈴木武晴

SUZUKI Takeharu

一 序

甲斐の国(山梨県)の酒折の宮のことは、『萬葉集』と寄り添い二つで一つの大きな有機的構造体を成す『古事記』(和銅五年(七一二年)成立)の、倭建命やまとたけるのみことの物語に記されている。その酒折の宮で交わされた倭建命と御火焼みひたきの老人おきなの片歌問答は、筑波問答とも呼ばれ、連歌の起源とされている。しかし、その捉え方は、問答の表層にとどまり、内容についてはいまだ文学的に深く捉えられているとは言えない。それゆえ、本稿は、あらためて倭建命の物語全体の中に問答を定位し、その内実を文学的に考察する。そして、その結論を踏まえて、廣瀬本萬葉集の書写者の中心人物の春日昌預かすがまさやすと萩原元克はぎはらもとの酒折の宮の歌を詳察し、国学における酒折の宮の存在意義を明らかにしたいと思う。

二 火と水の二面性及び火の癒しと問答

当面の問答の部分を掲げよう(本文は、新潮日本古典集成本の訓み下し文に拠る)。

甲斐に出でまして、酒折の宮に坐いましき時に、歌ひたまひしく、
新治にひはり 筑波つくはを過ぎて 幾夜いくよか寝つる
しかして、その御火焼みひたきの老人おきな、御歌みうたに續つぎて、歌ひしく、
かがなべて 夜よには九夜ここのよ 日ひには十日とつかを
ここをもちて、その老人を誉ほめて、すなはち東の国あづまの造みやづこを給たまひ
き。

御火焼みひたきの老人おきなは、夜警の篝火を焚たきいて守る老人をいうので、倭建

命と老人は篝火に照らされながら問答を交わしたものと見られる。

火と言え、倭建が相武の国（神奈川県）で遭遇した火攻めの難が想起される。その国の造が、倭建が立ち入った野に火を放った時、倭建は東征の旅の最初に立ち寄った伊勢の皇大神宮の、斎宮であった姨倭比売から授かった囊をあげ、中にあった火打石で向かひ火をつけて、難をのがれた。ここには、火のプラス面とマイナス面の二面性が示されていると言える。

また、走水（浦賀水道）では、渡の神による水難に遭い、愛する后弟橘比売を亡くしてしまう。このような水のマイナス面に対するプラス面として、伊服岐山（滋賀県と岐阜県の境の山）の神が大氷雨を降らせて倭建を困惑させるけれども、玉倉部の清水の力によつて正気にかえることができたという記述をあげることができ

る。このように、倭建譚は、火と水の二面性が物語の要素となつているのである。してみると、当面の問答の部分も、新たな読みが可能となる。すなわち、この部分は、火攻めの難に対する、火の安らぎ・火の癒しを物語るといふ読みである。篝火の火は、倭建命をあたたく守り、その心身を癒す。静かにゆらめく火の生命の力によつて、倭建の生命の火は力をとりもどしてゆくのである。

このような状況のもと、倭建は御火焼きの老人に、「新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる」と問うのである。これを受けて老人が答えた歌は、「日数を重ねて、夜では九夜、昼だと十日になります」の意。通説では、即座に答えたので、倭建は老人を誉めたと捉える。しかし、理由はそれだけではあるまい。答歌そのものが倭建の心に響くものを内在していたからであろう。

倭建の問いの中心は、「幾夜か寝つる」。これに呼応する老人の答えの部分は、「夜には九夜」である。老人はこれを歌の中心句の第二句に据え、上に「かがなべて」の修飾句を置き、下には「日」を対置して「日には十日を」と答えたのである。倭建の問いの意識の焦点は「夜」にあつたけれども、老人の答歌を聞いた時、筑波を過ぎてからの十日間の昼間の足跡が脳裏をよぎったことであろう。そして、今、篝火の火に照らされ守られてある己が生命を、深々と自覚したことであろう。倭建に筑波以降の過ぎし日々を顧みさせ、今在ることの安らぎを認識させた歌、それが老人の答歌なのだと思う。一見単純に見える問答歌も、このような心あたたまる内実をもつて輝く歌と文学史上に定位すべきである。

三 廣瀬本萬葉集の書写者の酒折の宮の歌

酒折の宮での倭建と御火焼きの老人の問答を強く深く受けとめていた甲斐人がいる。藤原定家本萬葉集の系譜に立つ廣瀬本萬葉集の形成に重要な役割を果たした春日昌預と萩原元克である。酒折の宮での事績の認識の深さを物語るのが二人の酒折の宮の歌である。

酒折の宮は奇しくも定家の系譜に立つ冷泉家と歌の縁をもつ。すなわち、一七〇五年（宝永二年）三月に甲府城主となつた柳沢吉保の、嫡男吉里が享保年間（一七一一一七三六年）に中院大納言通躬ら八人に甲府八景の和歌を請い、奏聞して中御門天皇の勅許を得た甲府八景和歌の、「酒折の夜雨」と題する次の一首を冷泉中納言爲綱卿が詠んでいのである（爲綱は冷泉家十三代当主）。

暮ぬ間をあらしは絶て酒折に枕かる夜の雨になる宿

甲府八景和歌は萩原元克の『甲斐名勝誌』(一七八三(天明三)年刊)にも記されており、春日昌預もむろん知っていたであろう。

a 春日昌預の酒折の宮の歌

廣瀬本萬葉集の書写統括責任者であったと見られる春日昌預が詠んだ酒折の宮の歌は、左記のように、短歌二十八首・長歌一首の計二十九首の多数に及ぶ(歌数の調査には、吉田英也編著『春日昌預全歌集』を用いた。以下、番号付き歌の本文も、基本的に〈若干の修正あり〉この本に拠る)。

1. 家集(安永八年亥七月?) 短歌二首
2. 家集(天明五年(寛政六年)) 短歌十首
3. 家集「梨園集」(寛政四年) 短歌二首・長歌一首
4. 家集「梨園集」(寛政十一年) 短歌十首
5. 家集「梨乃耶集」(文化六年) 短歌一首
6. 家集「梨園集」(文政五年) 短歌三首

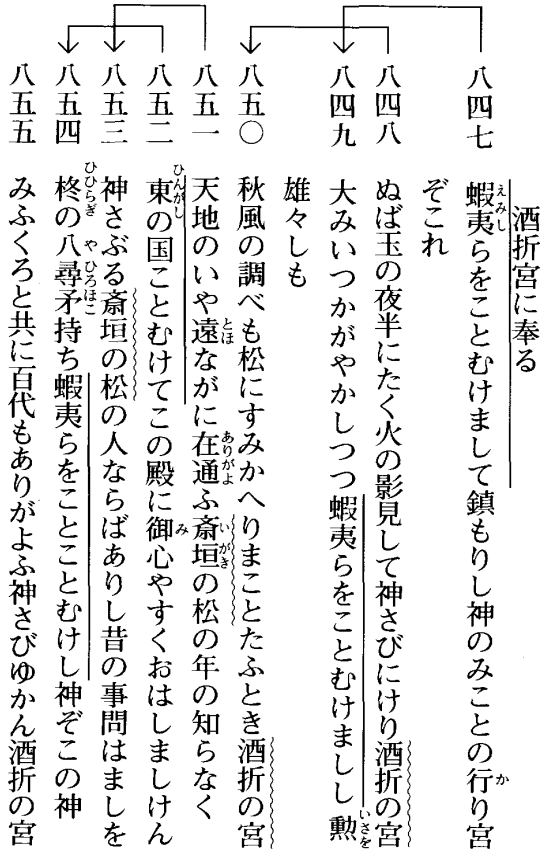
歌詠を順に検討してゆこう。まず、1の家集(安永八年亥七月?)の酒折の宮の歌。

四八五 酒折の宮にて八月十五夜
新治の昔を語れ秋の月玉垣に神代の月の光かな

五四二 酒折宮へ月のころ詣で侍りて
新はりや筑波を過ぎてこの里に心もきよく月や見つらん

四八五歌は、倭建命が「新治 筑波を過ぎて……」と詠んだ昔のことを語ってほしいと秋の月に願う。おりから酒折の宮の玉垣には神代から変わらぬ月の光が注いでいる。五四二歌は、上掲倭建の間歌の二句までを踏まえ、倭建が心も清く明月を仰ぎ見たであろうと想像している。

以上二首、酒折の宮に清らかな光を注ぐ明月を詠む点に特色がある。二番目の家集(天明五年(寛政六年))の酒折の宮の歌は、短歌九首連作と単独の短歌一首。九首の群(八四七(八四五))は次のとおり(傍線・波線・矢印線は稿者による)。



右九首歌群は、配列上、春日昌預の父春日翼の逝去（寛政二年（一七九〇年）六月四日のこと）を悼む歌（八一三〜八三七歌）の後にあり、一周忌の歌（八九六〜八歌）の前に在する。このことと、第四首八五〇に「秋風」が詠みこまれていることを勘案すれば、寛政二年の秋の詠作と推察される。

九首は、前半四首と後半四首、それに前後半を統括する一首とから成ると考えられる。前半四首も後半四首も、対応する表現に傍線と波線を付し、上部には矢印線で歌の対応を示したように、それぞれ四首の第一首と第三首、第二首と第四首とが対応する構成となっている。この対応構成は萬葉集によく見られる構成で（今、流下型対応構成と呼ばれている）、春日昌預はそれに倣ったものと思われる。

具体的に見てみよう。前半四首は、第一首八四七と第三首八四九が倭建命の功績を讃え、第二首八四八と第四首八五〇が「酒折の宮」を讃えて、それぞれ響き合う。第四首八五〇の上三句は、先掲四八五歌・五四二歌にうたった酒折の宮から仰ぎ見る明月を意識しつつ、酒折の宮の松を渡る清風を詠んだものと言えよう。

一方、後半の四首は、第一首八五一と第三首八五三が酒折の宮の「斎垣の松」の悠久性を時間的観点から讃え、第二首八五二と第四首八五四は、倭建の功績を倭建の内面と外面の両面から讃えている。第一首八五一の下二句は、萬葉集の次の歌の下二句を踏まえたものと指摘できる。

紀朝臣鹿人が跡見の茂岡の松の樹の歌一首

茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の木の年の知らなく

（六九九〇）

また、後半第三首八五三歌も、倭建物語の、倭建が尾津の崎（三重県桑名郡多度町）の一つ松を詠んだ次の歌謡を踏まえていると見て間違わない。

尾張に ただに向へる

尾津の崎なる 一つ松 あせを

一つ松 人にありせば

太刀はけましを きぬ着せましを

一つ松 あせを

九首連作最後の八五五歌は、前後半を統括して立つ。そう見るのは、八五五歌の上三句「みふくろと共に百代もありがよふ」が「みふくろ」は姨倭比売が倭建にさずけた、火打石の入った袋のことであるが、ここでは特にその中身の火打石をさすのであろう）、後半四首の第一首八五一の「天地のいや遠ながに在通ふ」をうけ、八五五歌下二句「神さびゆかん酒折の宮」が、前半四首の第二首八四八と第四首八五〇の「酒折の宮」の体言で印象的に歌い収める下二句をうけているからである。特にその八四八歌の「神さびにけり酒折の宮」という現在の詠嘆に対して、これからも神々しくあり続けるであろう酒折の宮の未来を予祝して、九首歌群を歌い収めている。

二つ目の家集（天明五年〜寛政六年）に目を移そう。それに収録

されている酒折の宮の歌は、単独一首の次のような短歌である（歌の原文の左は先掲書編著者の訓み下し文）。

献酒折宮歌

九〇五 天津日乃光登共尔輝加須迦微能命之御稜威由々斯毛

（天つ日の光と共に輝かす神のみことの御稜ゆゆしも）

この歌は、春日昌預の亡父一周忌の歌（八九六〇八歌）のすぐ後に存するので、それと同じく寛政三年（一七九一年）の歌と覚しい。

当歌は、正訓字と萬葉仮名とによる表記法が目を引き（この表記法は、昌預の酒折の宮の歌ではこの一首のみ）。昌預は何故このような表記法を用いたのか。

それは、昌預が、正訓字と萬葉仮名で書かれた本居宣長の「酒折宮寿詞」を尊び、その表現と表記法を踏まえたからだと考えられる。本居宣長の「酒折宮寿詞」は、宣長の門弟で酒折の宮の神主であった飯田正房が、宣長門の先輩萩原元克を通じて宣長に依頼し書いていただいたもので（寿詞には、後掲のように、寛政三年（一七九一年）正月の年記がある）、その全文が酒折の宮の石碑に刻まれ（碑の陰銘には天保十年（一八三九年）十一月の年記あり）、今に伝えられている。その全文を酒折の宮作成資料に基本的に拠って（若干の修正あり）ルビ付きで掲げれば、次のとおり（傍線と波線は本稿者）。

（碑文 表）

酒折宮寿詞

那麻余美乃此甲斐国^の之此酒折宮者母与

纏向之日代宮御宇天皇命大御代尔倭男具那倭建男

天下之益荒建男神建男登皇子之随所選賜氏千引石乃重伎難

伎大命乎重浪之類蒙斯氏西国能无禮能曾乎言向賜比東

国之荒振蝦夷乎和賜氏神登母神登宇都皆美乃世迹無比伎建

伎由々斯伎大御稜威之天下尔萬代迹天津日登照耀加須

宇豆能大御子倭男具那倭建神之命之事訖氏大事竟氏蜻蛉鳴

倭国尔還坐時衣手能常陸乎過足柄御坂乎越而御篤刈科野国

之御坂神乎多比良宜牟登過理坐流其道之其行宮登神隨返坐

氏後世迹片歌之続歌之事之始登仰那流新治筑波乃大御歌乎

読斯賜幣流其宮所蹟处登百繼十嗣御世者移礼杼千年五百年歳

者経奴禮杼余呂志那倍宮者宇勢世受跡者絶不為今行前母比佐迦

多能天津日登天津日嗣登倭男具那倭建神命之無比伎建御

稜威乃大御名登共々迹諸共迹長良閉弓伝理豆萬代尔常登波尔

弥高迹弥広迹照将行采往牟宮处蹟处

寛政之三年云歳之正月

伊勢国飯高郡之御民 平阿曾美宣長畏々寿白

弟子 平阿曾美篤胤齐利謹書

春日昌預は、この「酒折宮寿詞」の傍線部（「神登母神登」から「倭建神之命」まで）を踏まえて九〇五歌を詠み成したものと考えられるのである。両者の内容も使用語句もほぼ一致しており、「天津日」「輝加須」「御稜威」「由々斯」の原文表記の一致も、偶然のこととは思われない。

春日昌預は、寛政三年の正月に、萩原元克のもとか直接酒折の宮の飯田正房のもとに送られてきた本居宣長の「酒折宮寿詞」を見せてもらったのであろう。^{（注1）}昌預は一見してその寿詞に深く感動し、それに触発されて、九〇五歌を詠み成したものと思われる。

酒折の宮には、本居宣長のこの寿詞以前に、「寶曆十二年壬午夏四月」の年記を有する、山縣昌貞（大式）の文と加藤（春日）翼の書による「酒折祠碑」が建てられている（この碑文については、拙稿「甲斐と萬葉集（四）」（都留文科大学研究紀要第62集）に掲載し考察したので再掲は控える）。留意すべきは、春日昌預の父加藤（春日）翼が山縣大式の思いとその文に共鳴して書を担当していることである。昌預はこのことを深く心にうけとめていたに違いない。それゆえ、新たな碑文建立のために寄せられた宣長の「酒折宮寿詞」に深い関心を寄せ、実際にその文に接して、深い感動にとらわれたのである。昌預はその感動を九〇五歌にうたいあげたが、九〇五歌だけで収まるものではなかった。寿詞の傍線部のみならず全文を踏まえて詠み成したのが、この九〇五歌を反歌に据えて立つ長歌一〇三二歌である（三番目の家集「梨園集」（寛政四年）所収）。

酒折宮へ奉りし歌

一〇三二 かけまくもゆゆしきかもよ巻向の日代の宮に天の

下しろしめしけむ天皇の神の命の大御世に倭童男の

皇女腹もあれましなから御心のさとく賢く御勇のた

けくしませば大王の御言かしこみ出でたりし西の国

への不順人を言向東のあらぶるえみし和しつづり

りまさんと常陸なる筑波を過ぎて此の宮にしづもり

賜ひ新治の歌偲ばしし昔方はいく世か経けん其の跡

を夜に九夜と瑞垣の久しき世々に語り継ぎ言ひ続け

来つつ玉かつら絶事なく久方の日月とともに諸人の

仰ぎまつりて行く末も天地の共在り通ひ神さびゆか

ん此の宮処

かへし歌

一〇三三 あまつ日の光とともに輝かす神のみことのみいつゆ

ゆしも

宣長の寿詞と昌預の長歌一〇三二は、「巻向の日代の宮に」から説き起こし、「宮処（蹟処）」で印象深く歌い収める構造も共通している。また、波線で示したように、共通・類似の表現も大部分を占め、叙述の流れも共通している。よって、昌預は、宣長の「酒折宮寿詞」の全体を踏まえて、長歌一〇三二を詠み成したと断言できる。ただし、一〇三二歌の冒頭二句「かけまくもゆゆしきかもよ」は、萬葉集の柿本人麻呂の高市皇子挽歌の長歌（巻二・一九九歌）の冒頭二

句「かけまくもゆゆしきかも」に拠り、歌い収めの末尾二句「神さびゆかん此の宮処」は、萬葉集の山部赤人の「伊予の温泉に至りて作る歌」(3二二二～三二)の長歌三二二の末尾三句「遠き代に神さびゆかむ幸し処」をも念頭に据えていたことを語り告げている。

春日昌預は、寛政四年、おそらくはその正月に、宣長の寿詞を想起したことが契機となつて、再び感動が胸に湧き上がり、創意が高まつて、前年に成した九〇五歌を反歌に据え、「酒折宮寿詞」全体の構成と表現及び叙述の流れを踏まえて、長歌一〇三二を詠み成したのである。倭建命の功績の過程を詠むこの長歌一〇三二によつて、結果としての功績の輝かしさを詠む反歌一〇三三は、いっそう輝きを増すのである。

この長反歌の直後には、弥生の末の酒折の宮を讃えた次のような歌が存する。

弥生の末酒折へ詣でて

一〇三四 瑞垣の松も松原も色さびて神代ゆかしき酒折の宮

当歌は、上掲長歌一〇三二の「瑞垣の久しき世々に」以下「神さびゆかん此の宮処」までを意識し、具体的に瑞垣の松と松原の色を通して神代と連なる酒折の宮のゆかしさを述べた歌と読める。

四番目の家集「梨園集」(寛政十一年)にも、昌預の注目すべき酒折の宮十首連作が存する。それは次のような八月十五夜の連作である。

八月十五夜思ふどち伴ひて酒折の山へ登りける

にうち曇りければ

二〇八五 年毎に今宵の空の習ひとてわりなく曇る望月の影
二〇八六 山風は文無な吹きそこの夕べ月待つ峰の雲は払はで
二〇八七 久方の空は暗れ間も見えながら月待つ峰に掛かるう
き雲

二〇八八 なれもまた同じ心に思ふらむ雲間の月を松虫の声
二〇八九 生憎の世の習ひとは知る知るも思へばつらし曇る月
影

二〇九〇 待ちわびし高根の月もかき曇り時雨を急ぐ松風の声
二〇九一 かき曇る月に恨みも暗れなまし仄かにだにも光見せ
なば

かくてしばし待ちけるほどに雲間に影の見えけれ
ば
二〇九二 雨雲の僅にだにも洩れざらば今宵の月の光を見まじ
や

程なくまた曇りける
二〇九三 山の端の雲のはつかに見し影や名に負ふ月の光なり
けん

酒折の宮にて鈴虫を聞きて
二〇九四 みともしの影もほのかに小夜更けて心寂びゆく鈴虫
の聲

以上十首、「酒折の山」での九首とその麓の「酒折の宮」での一首とから成り、全体には逐時的配列がほどこされている。

「酒折の山」での七首(二〇八五～二〇九二)の群は、明月を期

待して酒折の山に登ったものの、それに反して雲がかかり見ることのできないことを嘆く歌で、四首・二首・一首の連繫体と見られる。

その四首（二〇八五～八八）は、第一首二〇八五と第三首二〇八七が「空」の語を共有し、前者が年毎の八月十五夜の空の状況を述べるのに対し、後者は当年の今宵の空の状況に限定して述べている。一方、第二首二〇八六と第四首二〇八八は、前者が酒折の山の風呼びかけ、後者は酒折の山の恋しげに鳴く松虫に思いを投影させて響き合う。このように四首は、先述の八四七～八五〇歌、八五一～八五四歌の四首構成と同様、萬葉集の四首構成の型を踏んでいると言える。

明月を仰ぎ見ることのできない嘆きは、二〇八五～八八の四首を歌うだけでは払拭できなかった。そこで歌い継いだのが、第五首二〇八九と第六首二〇九〇の二首である。

第五首二〇八九は、四首歌群の第一首二〇八五を意識し、その上三句「年毎に今宵の空の習ひとて」に「生憎の世の習ひとは知る知るも」と対応させ、二〇八五歌の下二句「わりなく曇る望月の影」には「思へばつらし曇る月影」と呼応させている。

このように第五首二〇八九が四首歌群の第一首二〇八五をうけるのに対し、第六首二〇九〇は、四首歌群の第二首二〇八六から第四首二〇八八までの三首をうけている。すなわち、第二首二〇八六の「月待つ峰の雲は払はで」と第三首二〇八七の「月待つ峰に掛かるうき雲」を上三句「待ちわびし高根の月もかき曇り」とうけ、第四首二〇八八の「雲間の月を松虫の声」に対しては、「時雨を急ぐ松風の声」と呼応させて結んでいる。

第七首二〇九一は、第五首の「生憎」をうけて「かき曇る月に恨

みも晴れなまし」と仮想をもって歌い起し、下二句に「仄かにだにも光見せなば」と希望的假定条件を述べている。その下二句は、萬葉集の柿本人麻呂の泣血哀慟歌の第二長歌（巻二・二二〇番歌）の末尾三句「玉かぎるほのかにだにも見えなく思へば」の否定的確定条件の表現を意識し、それに対して、肯定的希望的假定条件を提示したものと考えられる。

実現を祈るその思いの力によってか、空の状況に変化があらわれる。雲間に月の光がわずかに見えた。そのことに、心がたかぶって詠んだのが第八首二〇九二である。こうして見ると、第七首二〇九一は、二〇八五～二〇九〇歌の六首と第八首二〇九二との継ぎの役割を担っていることが知られる。このことも作者昌預の意図するところで、その点に第七首二〇九一歌の存在意義が存すると思われる。

月の光が見えたのも、ほんのつかのま。再び曇って、詠んだ歌が第九首二〇九三である。先刻雲間に見えた幻のような月の光に思いを致し、姿をあらわしてくれない明月に思いを馳せて、「酒折の宮」での一連九首を結んでいる。

「酒折の山」を下って、麓の「酒折の宮」で詠んだのが第十首二〇九四歌。その上二句「みともしの影もほのかに」は、夜更けまで燃えつづける篝火の光のほのかさをいう。それは、前九首（二〇八五～九三）において思いを寄せた望月の影（光）に対する地上の影（光）である。このことも、昌預の意図的な布置と思われる。当歌下二句の「心寂びゆく鈴虫の声」は、先述の四首（二〇八五～八八）と二首（二〇八九～九〇）の歌群をそれぞれ歌い収める、二〇八八歌の下二句「雲間の月を松虫の声」と二〇九〇歌の下二句

「時雨を急ぐ松風の声」とを意識しての表現。特に、酒折の山の「松虫の声」に酒折の宮の「鈴虫の声」を対したものと見える。外に向かつて恋しげに泣く松虫の声に対して、内に沁み入るように清らかに鳴く鈴虫の声。酒折の山で落胆と期待の波に揺れた昌預は、酒折の宮の境内に立ち、清寂の境地に誘う鈴虫の声に聞き入るのである。以上、八月十五夜十首連作は、場と状況の変化に即して思いを詠み継いだ、みごとに逐時的連作ということができよう。

最後に、第五家集「梨乃耶集」（文化六年）と第六家集（梨園集）（文政五年）の酒折の宮の歌に注視したい。

◎「梨乃耶集」（文化六年）

酒をりの宮へもうでて
二七六八 初花の色もさすがに物ふりてむかしおぼゆる神がきのうち

◎「梨園集」（文政五年）

それより酒折の宮へ詣でて詠める
三八三四 咲き初むる桜の花の匂ひさへ御注連の内は神さびにけり
御社の内もの古りにたるを見るにつけても漫ろに
昔しぬばえて
三八三五 まきむくの日代の御代の昔よりあり立たすもよ酒折の宮
酒折の宮へ詣でけるに暮れてほととぎすの鳴きけ

るを

三九六三 大み火の影を恋しみほととぎすこの注連の辺に今宵
鳴くかも

すでに考察した歌に見たように、春日昌預は風月に思いを寄せて酒折の宮をうたった。その詠作姿勢は、花（桜）・鳥（ほととぎす）に寄せての酒折の宮歌へと展開していることが、右の歌詠によって知られる。桜の花の色香も神さびて遠い古をしのばせ、遠い古の篝火の光を恋慕って、ほととぎすが歌い鳴く。

以上論じてきたように、春日昌預の酒折の宮の歌は、花鳥風月に寄せて酒折の宮の神々しさを詠んでいる点に特色があるといえる。

b 萩原元克の酒折の宮の歌

春日昌預とともに廣瀬本萬葉集の形成に重要な役割を果たした萩原元克も、酒折の宮を歌に詠んでいる。それは、元克の詩歌集『殊音同帰』（成立年月日未詳）に収められている次の歌である（本文と歌番号は、『山梨県史』資料編13に拠る）。

20 酒折宮歌

まきむくのひしろのみやに天の下しろしめしける天皇の皇子の命はしらぬひつくしの国にまつろはぬくまそたけるをつみなひていくたもあらねは鳥がなくあつまの国のえみしらをしつめやはせとすめろぎのまけのまにくつるきたちこしにとりはきき千万の大御軍をはろくにあともひ給ひ天雲のむかふすきはみ

谷くくのさわたるかきり海山のあらふる神をことむけて帰りま
す時なまよみのかひの国のさかをりの山のたをりにかりみやを
仕まつりてゑらゑらにうたけましけるその時に御火たくをちか
にひはりのみうたの末をいそしくもつきまつりけるふることを
かたりつかひてあつさ弓すゑの世までに諸人のあふきたふとみ
此宮にまうつる見れはいにしへのいまも見ることもおもほゆらく
も

万代に神さひたてるさかき葉のかけもさかゆく酒折のみや

当歌は、萬葉集歌の語句・表現を駆使して酒折の宮の現在を讃え、
そして弥栄を予祝している。

萬葉集歌では特に柿本人麻呂の高市皇子挽歌の長歌(巻二・一九九
番歌)の「鳥が鳴くあつま」「やはせと」「まつろはぬ」「御軍
をあどもひ給ひ」などや、山上憶良歌の「しらぬひ筑紫の国
に」(579四)、「天雲の向伏す極み たにぐくのさ渡る極み」
(580〇)、「剣大刀腰に取り佩き」「いくだもあらねば」(以上、
580四)、さらに大伴家持歌の「ゑらゑらに」(19四二六六)など
の語句・表現の襲用を指摘できる。

当歌でとりわけ目を引くのは、「なまよみの甲斐の国」の表現で
ある。これは、萬葉集の高橋虫麻呂歌集所出の「富士の山を詠む歌」
(巻三・三一九〜三二二)の長歌三二九の冒頭二句(萬葉集中この一
例のみ)の襲用。元克は廣瀬萬葉集のその歌の「石花海」に注を
付して、

石花海 元克按 甲斐國八代郡二今西湖ト云フ湖アリ是セの海

なるべし 西はセノ音なるを何れの頃よりかにしと誤けん

と記しており、思い入れのあるその「富士の山を詠む歌」の「なま
よみの甲斐の国」の表現を用い、それに続けて酒折の宮での事績を
押し立て叙述しているのである。

このように元克は萬葉集歌の語句・表現を踏まえて当歌を詠み成
している。とともに、春日昌預と同様、本居宣長の「酒折宮寿詞」
をも意識した面が看取される。

宣長の寿詞と同様、「まきむくのひしろのみやに天の下しろしめ
しける天皇の」と説きおこし、西征東征を終えて「帰ります時」と
叙述を進め、「なまよみの甲斐の国」の「酒折の宮での倭建と御火焼
きの老人の問答の意義を老人の功績を讃える形で述べている。これ
は、宣長の寿詞の「後世迓片歌之続歌之事之始登仰那流新治筑
波乃大御歌乎読斯賜幣流」を意識し、「片歌之続歌」を成した御火
焼きの老人を讃えたものと覚しい。

元克歌の最後の段の「ふることをかたりつかひて」以下「おもほ
ゆらくも」の結びに至る部分は、寿詞の「百繼十嗣御世者移礼杼
千五百年歳者経奴礼杼余呂志那倍宮者宇勢世受跡者絶不為」の現
実を述べたところを意識しているよう。

そして、宣長の寿詞の「今行前母」以下「萬代尔常登波弥高迓
弥広迓照将行栄往牟宮処蹟処」の結びに至る酒折の宮の永遠の繁
栄を予祝する部分は、反歌の方に生かされていると考えられる。な
ぜなら、反歌は、寿詞と同じ「萬代に」の語句をもって歌い起こし、「常
登波弥高迓照将行」を、神事に用いる「さかき葉」の照り
輝く光によって具象化し、寿詞同様、「さかゆく酒折の宮」と結ん

でいるからである。

このように宣長の寿詞を強く意識しながら詠作している点からすると、詠作は寛永三年か四年の頃であろうと思う。宣長の寿詞の影響をうけつつも、元克は元克で詠歌の個性を発揮していることも看過できない。反歌は、「万代に神さひたてるさかき葉のかけもさかゆく酒折のみや」と「さ」の音がリズムを作って、読む者聞く者の心に快く沁み入る力を持っている。この点も評価されよう。

叙上のこととかかわって宣長の『鈴屋歌集』四の巻に収められている次の酒折の宮の歌について補足したい（歌の本文・番号は、『新編国歌大観』に拠る）。

かひの国の酒折宮よよみて奉れる

二〇二〇 かたりつぐ御歌とともに万世につぎて栄えむさかを
りの宮

この歌は同集同巻の寛政十一年春二月二十四日の二〇五八〜九歌よりも前に存するので、寛政年間の作と見られる。歌の表現に「酒折宮寿詞」との共通点と類似点が認められ、宣長が寿詞を送った折に付した歌の手控えである可能性もある。詳しいことはわからないけれども、元克の長歌の「ふることをかたりつかひて」以下反歌の結句に至る表現には、右掲歌の表現の影響も認められるのである。

三 廣瀬本萬葉集書作者の酒折の宮の歌の意義

以上、論述してきたように、廣瀬本萬葉集の形成に携わった春日

昌預と萩原元克の酒折の宮の歌は、自家薬籠中の物となった萬葉集歌の知識（語句・表現と構成）の応用であった。その知識の獲得には廣瀬本萬葉集の形成に携わったことが貢献しているよう。

先述したように、春日昌預も萩原元克も、本居宣長の寛政三年正月の「酒折宮寿詞」を踏まえて酒折の宮讃歌を詠んでいる。このことは、昌預も元克も、酒折の宮での事績を国学の源泉と捉え、酒折の宮を国学の一象徴と定位していたことを物語っている。

本居宣長と萩原元克が師弟の關係にあつたことは、萩原元克の氏名が宣長の「門人録」に記されていることから知られている。本稿はそのことを裏づける資料として新たに『鈴屋歌集』五の巻の次の歌を提示する。

甲斐国人萩原元克とぶらひきておのがをしへごに
なれるが、国にかへる時によみておくりける、此
人甲斐国名勝志といふ五巻のふみを作れるをこた
びもてきて見せたり

二一八一 なまよみの かひの国に 秋の野に しなひ栄えて
にほふなる 花の名におふ はぎはらの 君が此書
うまこりの あやにおむかし その甲斐の くぬち
ことごと 梶の音の つばらつばらに 山のそぎ野
のそぎ分けて くまもおちず しるしあげたる は
しきやし 君がいさをは 神のごと よに聞えくる
その国の 武田たけをの たけき名と 共にながれ
て 万世に しぬばえゆかむ 君がいさをは

この歌から、元克が天明三年（一七八三年）九月に刊行した『甲斐名勝志』五巻を直接宣長のもとを訪れて見せたことよって、宣長と元克の師弟の真実の交流が始まったという重要なことが知られるのである。この滞在期間に、天明二年（一七八二年）十二月に書写が完了した廣瀬本萬葉集のことも元克の口から話題にのぼったであろう。

本居宣長と萩原元克の關係に對して、本居宣長と春日昌預との關係は全く知られていなかった。けれども、本稿の考察によつて、昌預が宣長の「酒折宮壽詞」を強く意識して倭建命と酒折の宮の讚歌（九〇五歌・一〇三二〜四歌）を詠み成したことが明らかになった。廣瀬本萬葉集の形成時には、賀茂真淵（萬葉考）に敬意を表していた昌預であったが、真淵亡きあとの寛永三年から四年の頃には、賀茂真淵のあとに立つ国學者本居宣長に深い敬意を寄せていたのである。

（二〇〇六年（平成十八年）十月十日）

注

- （1）春日昌預と萩原元克は、廣瀬本萬葉集の形成に携わつた後も交流のあつたことが、昌預の「梨園集（寛政四年）」の次の歌（一〇〇二番歌）から知られる。

元克うしの室壽むろほぎに詠める

万代を祝ひこめつつ作りてしこの新室は居れど飽かめやも

春日昌預は、先述のように酒折の宮の歌を多数詠んでおり、酒折の宮の神主飯田正房とも交流があつたであろう。

稿者所蔵の、山梨の郷土研究者河野幸孝宛早川義信書簡の中には、宣長が飯田正房に詠んで送つた次のような歌が丁寧な翻刻をもつて記されている（現在その歌の所在は不明）。

飯田正房主の父主の七十賀に

椿しげくといふことを題にて、

よみておくる歌

宣長

立なれてともに

栄へてたま椿 八千代の陰

も 君ぞ見るべき

このように宣長が飯田正房に直接送つた歌が存することを考慮すると、宣長の「酒折宮壽詞」も、酒折宮当主飯田正房のもとに送られた可能性も十分あると思われる。

（2）「思ふどち」の中には、酒折の宮の神主飯田正房がいたであろう。また萩原元克もいた可能性もある。

（3）「それより」は、直前歌三八三三の題詞「弥生七日なぬかの日芝宮の神事みまつりて」をうけている。